

優秀賞

「私が目指す酪農」

帯広畜産大学
畜産科学科2年 酒井麻子

「酪農家になりたい。」そう思ったのは、小学校の低学年の頃だ。ドラマ『北の国から』を見たのがきっかけで、北海道に憧れ、いつしか自然の中で酪農業を営むことが夢となった。そのため、小さい頃から、近くの牧場に行ったりして、牛と触れ合う機会も多かったのだ。実際に、北海道の牧場を見てみたいと、小さいながら貯金もはじめた。そして、初めて北海道に上陸したのは、大学受験のときだった。高校3年の2月、ずっと憧れていた帯広にある畜産大学に受験に行った。それも、自分のセンター試験の結果をみても、合格はほぼ難しい状態だった。それでも一度、実際に自分の目で見たいと思い、小さい頃から貯めていた北海道貯金で行ったのだ。そこでの感動は未だに忘れていない。そして、それが浪人生活の原動力となったのは言うまでもない。そして今、夢を叶え、畜産の勉強をしている。

入学してすぐ、“農業は最大の環境汚染を引き起こしている”と聞いて農業に対する考え方は大きく変わった。調べてみると、畜産の環境汚染は想像以上のもので、衝撃を受けた。まさか、牛のゲップが温暖化を進行させていると思わなかったし、家畜の糞尿処理がここまで難航しているとも思わなかった。また、牛の頭数が、その土地で飼うことのできる頭数を上回り、放牧さえできず、牛たちは一生牛舎の中で太陽も浴びずに暮らしている。本当に異様な光景だ。私はずっと、北海道の牛は放牧され、自然の中でのびのびと過ごしているのだと思い描いていたため、衝撃的だった。

牛が本当に生き生きと過ごしているのを見たのは、酪農大国、別海町に行ったときのことだった。別海町では放牧が主流で、広い放牧地で牛が飛び跳ねていたのが印象的だった。毛並みも非常にきれいで、“健康な牛”という感じだった。これぞ、理想の酪農だと思った。そこで偶然、『林ファーム』という素敵な農家に出会った。ちょうど夕方で、牛を放牧地から牛舎にもどすところで、道路は一時通行止めとなったため、車を止め、その様子を眺めていたら、牧場の奥さんが出てきて、「牛舎の方入ってみない？」と声をかけていただいた。牛舎に入らせてもらうとそこにもまた感動があった。天井が高く、広々としていた。牛たちは、自然と自分の牛床に入っていく。特に搾乳を拒む牛もいないようだった。そこには、牛と人との関係というものを感じた。互いに信頼し合っているようにもみえた。牛はもはや“生産動物”としてではなく、本来の“牛”として飼われているようだった。林さん夫妻は、牛を本当にかわいがり、苦勞を見せない人たちで、酪農家を目指す私にとって尊敬できる存在だった。「牛はいいよ〜」って穏やかに話しているのも印象的だった。私はこういう酪農家になりたい。酪農家は、精神的にも強くないといけないし、おおらかに振舞える余裕が必要なのだと思う。そして、いくら動物だとはいえ、相手と接しているという感覚を忘れてはいけないと思った。だからこそ、一回

一回の仕事で気を抜けないし、牛の体調や性格までも意識して見る必要がある。それぞれの牛に合った接し方ができるくらい一頭一頭について、知っておきたい。本当に農家の人から学べることは多い。また、将来、農家をやるやらないを問わず、様々な面で見習うべき点は多いのではないかと思う。なんと言っても、ひとつのことを真剣に取り組む姿は素敵だ。

私は、北海道に貢献したい。長年憧れてきただけに、北海道に対する気持ちは強い。今、富良野で育成牧場を営むのが夢だ。広い放牧地で思いっきり放牧させて育てたい。牛自身が餌を探し、生きていくといった、牛が本来持つ“生息能力”を十分発揮させるのだ。餌はもちろん自家製で、輸入はしない。自分がすべきことは、土壌を最良の状態にすること。餌は土壌からできているということをおぼえてはならない。したがって、健康な牛を育てるには土壌管理を怠ってはいけぬ。今、土壌についても勉強しているが、難しさは半端じゃない。ここ十勝では畑作が盛んだが、それはもともと土壌が肥えているからではなく、もともと栽培に適していない、火山灰が降り積もってできたやせた土壌を人が肥料や石灰、リンなどを多量に撒き、管理することで成り立っているのだ。このように、北海道にはやせた土壌が意外にも多いという。だからこそ、牧場をはじめるまでに、土壌について深く知り、様々な問題を研究することで、少しでも改善していけたらと思う。大学という舞台がこれを実現させる絶好の場所であるだろうし、また、牧場の資金を貯めるためにも何年か畜産試験場に就職するというのも考えている。または、農協などの農業団体で働くのもいいと思っている。自ら農業に携わることで、行動を起こしたいからだ。大学を卒業してすぐに牧場を始めるのは、現実的にも難しいと思うから、少しずつ夢に近づけていこうと思っている。

なぜ育成牧場をやりたいかという、 “成育” という段階は、重要な時期であり、いい牛にするためにはやはり、小さい頃の成育環境が大事だと思うので、その時期に精一杯携わることで、質の高い牛を育てあげたいからだ。今年の6月の新聞に興味深い記事があった。【都会の子牛に「留学」ブーム】なんと魅力的な言葉なんだ!!記事を読むなり、感動し、鳥肌が立った。首都圏や関西で生まれ、北海道の雄大な大地でのびのびと育ててもらい、出産前に故郷に戻り、元気に牛乳を出そうという取り組みが、なんと20年も前から始まっているらしい。しかも、預けた側の牧場からは、「食べっぷりや、乳の出が全然違う!」と驚きの声が上がるといふ。ここからも、成育環境の重要性がわかる。そして、この留学生は年々増え、今では年間約3000頭にまでなっていることもあり、今後さらに、注目される分野になるのではないかと思う。私も興味を持ったので、実際に首都圏の牛を預かる農家さんに話を聞けたらと思う。そして、将来の育成牧場の参考にしたい。また、育成牧場をやりたいもうひとつの理由は、アルバイト先の牧場で、ある日、足が両側に開脚してしまい、床に倒れこんだ牛がいた。全く動けず、結局、機械を使って牛舎の外に出したのだが、そこで涙をポロポロこぼし、動かない足をじっと眺めていたのが印象的で、なにか動かされるものがあった。本当につらく思い、少しでも足

腰の強い牛を搾乳農家に送り出したいと思った。パーラーに行くまでの通路はどうしても滑りやすい。コンクリートの床のため、待っている牛が糞尿をすることでつるつるになる。そのため、足を引きずっている牛がなんと多いことか。運動不足で体が重そうな牛もなかなか多い。そういった現実をどうしても変えたい。

毎年、生産調整で、かなりの量の牛乳が捨てられている。どの農家も生き残りをかけ、頭数を増やし、さらには、海外から輸入した栄養の高い濃厚飼料を多量に与え続けることで乳量を増やそうと必死だ。その結果として、供給が需要を上回り、牛乳廃棄へとつながる。また、消化器系や循環器系の病気になる牛が増えていく。こんな悪循環な酪農は、質の高い酪農とは言えない。ただ農家だけが悪いのではないのだと私は思う。農家の余裕を奪っていく社会も問題なのではないだろうか。もっともっと、国や地方、また消費者もが農家に目を向け、頑張ってもらって支援をし続けてほしい。こうすることで、農家に余裕ができれば、新たな発想が出てくるのではないかと思う。また、店に並んでいる牛乳をはじめとする乳製品は、あまりにもきれいに加工されており、それらが、牛からの生産物であることや、酪農家が365日、汗水たらし、糞にまみれて働き生産された産物であるという、最も当たり前のことに意外と気づかず、意識されない。こういった現実を受け止め、将来、自分が立ち上げた牧場についてや自分が考える酪農についての本を出版し、多くの人に酪農について知ってもらいたいという気持ちはある。

今の段階で自分が将来目指す酪農について、ここで具体的に書いてみようと思う。『35歳、それまで自らが稼いだ資金をもとに、北海道で牧場を始める。できれば、頼れるパートナーと一緒に始めたい。オーソドックスに彼の苗字で〇〇牧場と名乗り、洒落た看板を立てる。なるべく土地にはお金をかけ、放牧するのに十分すぎるくらいの土地を得る。少しは山の斜面のような、傾斜のある土地も得る。牛の足腰を鍛えるためだ。その他に、冬場に備えて牧草やとうもろこしを作るための土地を得る。牛舎は天井を高くし、開放的にする。一頭一頭のしきりは作らず、自由に好きな場所に寝させることで、牛同士のコミュニケーションも大切にする。牛の暑がりな性質を考慮し、水飲み場もできるだけ多く作る。床一面にふかふかになるくらいのワラを敷き詰め、よく眠れるよう心がける。牛舎内には時々、心地良い音楽をかけることで、気分転換、そしてリラックスをさせる。だいたい50~60頭の牛を預かり、毎日一頭一頭に気を配るようにする。母牛がいない分、十分に愛情を注いで育ててやる。よく撫でてやり、気になる汚れは落とすことでダニが湧かないようにする。とにかく清潔さを心がけ快適に過ごせるよう、いつも意識しておく。糞尿は屋根つき施設に移動し、しっかりと発酵させ、畑に還元する。そして、近隣の農家さんなどからもアドバイスをもらいながら、牧場経営を進めていく。最初は借金も多いが、毎年少しずつ返済し、徐々に軌道に乗せていく。返済の目途がつけられたら、牛舎や家庭内で使う電力が供給できるくらいの小型のバイオガスプラントを購入し、エコな牧場を目指していく。

まだまだ大まかではありますが、これが、将来私の経営する牧場です。北海道で酪農を営む以上、全国のモデルとなるような牧場にしていきたい。以上に記した“酪農の夢”を強い志を持って、実現しようと思う。
